小林　茂　編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』

大阪大学出版会　2017年２月　266頁

7,400円＋税

編者の小林を中心とした研究グループによる前著『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域―「外邦図」へのアプローチ―』の刊行から８年が過ぎた。その間に小林『外邦図―帝国日本のアジア地図―』（中央公論新社〔中公新書 2119〕，2011）が刊行され，また駒澤大学地理学教室『外邦図目録・第二版』(2016) などの関係目録の整備もさらに進んで，外邦図研究は着実に進展してきた。2003年刊行の浮田典良編『最新地理学用語辞典―改訂版―』(大明堂) において「街道図」の項目があっても立項さえされていなかった「外邦図」は，人文地理学会編『人文地理学事典』(丸善出版，2013) において「地籍図」や「地形図」並みの立項がなされるまでになった。10余年前には日本軍が領域外地域で作製した地図程度の漠然とした知識にとどまっていた外邦図に関する理解は，その研究の進展に助けられて長足の進歩を遂げてきたといえよう。

そうした研究の進展は，必然的にそれまで「外邦図」と認識されていなかった地図の再検討を迫り，また調査過程で新たに発見された地図の研究を求めることにもなった。本書は，大阪大学人文地理学教室の関係者を中心にした研究グループが，それら新たな知見に対して前著出版後に発表してきた諸論考に加筆，修正のうえで集成したものである。

さて，「はしがき」(小林) で「本書は，日清戦争にむけて日本が明治初期から行った外邦図作製をあとづけるとともに，今日私たちが見ることができるその時期の外邦図の全容を示すために執筆された」とし，前著によって見えた新たな課題のうち「とくに初期に作製された外邦図の作製過程に焦点をあわせ」(ｉ頁) たと語っている。本書の主たる対象は米国議会図書館 (以下，LC) の所蔵する，約500点におよぶ1880年代の日本軍将校の作製した中国大陸と朝鮮半島の手描き原図や，台湾遠征に関連した日本軍翻訳の西欧製地図・海図，戦史などである。編者は「外邦図研究の視野を日本に限ることなく，海外に大きく拡大する必要性を痛感した」(ⅱ頁) と記す。そのため本書の対象図版の多くは初見の原図であり，冒頭の口絵からもその稀少性が伝わってくる。

それらを対象とした本書は，序説に相当する第１章を除く第２～７章とコラムを，第Ⅰ～Ⅲ部に分けて構成し，巻末に目録を配して，その解題を付している。

第１章「近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図」(小林) は，まず外邦図が『陸地測量部沿革誌』などの正史に相当する書籍では等閑視され，また国内各大学の所蔵図版の多くも改版ごとに順次昭和期発行の新しいものに差し替えられたため，旧版外邦図に接すること自体が基本的に困難という。また戦中期陸地測量部が長野県に疎開させていた外邦図が，終戦直後進駐してきた米軍によって接収され，それが現在LCの所蔵になったとする。そして所蔵の1880年代に中国大陸や朝鮮半島で密測した陸軍将校の測量地図の多くがコンパスによる方位計測と歩測にもとづいた簡易測量による手描き地図であるという。それらは前述の正史や後期の製版図からは得られない情報の宝庫で，その情報を本書では「海外地理情報」と称している。さらにそれらの調査を通じ，初期中国図においてアロー戦争の影響が濃厚であること，当時東アジアには海岸部に関する詳細な欧米製海図が存在した一方で，内陸部については正確さを欠く現地製図版に依存を余儀なくされた状況などを明らかにした。そして前述の1880年代の手描き地図に加え，その後の日清戦争や北清事変の機会を利用して編集図として作製した20万分１図までが，本書での「初期外邦図」に相当し，さらにそれらは日露戦争時の「臨時測図部」の派遣による戦時測量によって面的測量を経ることで正確さを高めた。第二次世界大戦後の接収日本語資料の宝庫として知られるLCに，手描き地図のような一次 (特殊) 史料がかくも大量に所蔵されていることは，評者にとっては初見で，今後より多様な調査の可能性を感じたが，この点は後述したい。

「第Ⅰ部　初期編集外邦図」は２つの章から構成され，前述の20万分１図が主な研究対象である。

第２章「東アジア地域に関する初期外邦図の編集と刊行」(小林・岡田郷子・渡辺理絵・鳴海邦匡) は，先行する欧米の戦時測量による成果を吸収した初期刊行の編集図の多くが小縮尺で情報そ

のものの新しさはないと思われがちながら，そこに中国製や朝鮮製図の伝統的様式を交えて作製した点を見出した意義は大きいとする。明治維新から間もない1874年の台湾遠征時に日本軍は台湾に関する地理情報をほとんど持たず，アロー戦争時に英仏両軍が作製した図の翻訳・複製によって対応した。その後1880年代にかけて陸軍は中国大陸や朝鮮半島に将校を派遣して簡易測量のもとに整備したのが20万分１編集図であるとする。それらの基礎になったものに，中国の伝統的地図を簡略・モノクロ化して秘密裏に筆写複製した「台湾島清国属地部」，アロー戦争時の英仏両軍の成果に1854年の米国の測量成果を交えた「北河総図」，1873年刊行で現時点最早期の「朝鮮全図」，ロシア製の東シベリア図をもとにロシアとイギリスの海図を用いて満洲派遣陸軍将校の情報を加筆した「アジア大陸図」などがあるという。要するに東アジアの初期地図整備には欧米の地理情報への依存が高かったことになろう。ここで「東アジア」という括りを提示されたのを見て，明治初期の日本の迅速測図や仮製図の制作における欧米の情報や方法への影響については，どの程度解明が進んでいるのかに疑問を抱いた。

第３章「19世紀後半における朝鮮半島の地理情報の収集と花房義質」（小林・岡田・鳴海）は，初期外邦図の集中する中国と朝鮮のうち後者を対象としている。19世紀後半の朝鮮では近代測量の及ばない内陸部はおろか，沿岸部の航行用海図さえ欠く状況で，その点は清国と大きく異なっていた。1872年にいち早く釜山に派遣された外務省高官花房義質は明治政府の存在を印象づけるために大型艦船を差し向けたが，その際に横浜と上海で外国船から朝鮮の海図の貸与を受けて臨んだという。そうしたなかで1873年10月に日本海軍水路部刊行の「朝鮮全図」は前年花房らの朝鮮渡航時に得た地図を元図にしたものと推定されるが，旧式の地図ながら欧米製海図では判明しない現地地名が明らかになる。そして海軍艦艇が釜山に派遣されて測量を行っていた際に江華島事件が発生したが，それによって締結され，朝鮮開国の契機となった日朝修好条規は，朝鮮沿岸の測量においても大きな転換点をなし，朝鮮製の「朝鮮全図」のほか漢城（ソウル）の地図などの借覧の機会にもなったという。それら朝鮮沿岸測量に尽力した花房は倭館交渉以来朝鮮の地理情報に関心を寄せたのみならず，東京地学協会の設立時の中心メンバーとしても活躍した。本章は，朝鮮の地理情報取得の実態を解明した主題もさることながら，評者には東京地学協会設立に関わった軍人が単なる「名士」にとどまらず，実務的役割を兼ねて参加していた点の実証により深い興味を感じた。

「第Ⅱ部　初期外邦測量原図」は３つの章から構成され，手描き原図が主たる対象である。

第４章「中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争」（小林・渡辺・山近久美子）は，2008年のLC調査で発見した1880年代に日本軍将校が中国大陸，台湾，朝鮮半島で測量，作製した手描き原図と日清戦争の関連を明らかにしている。日清戦争前の陸軍将校による中国大陸での活動を，『満洲紀行　丁號』から追跡し，道路事情や橋の種類，渡船の有無などの情報が収集される一方，ブラントンコンパスなどの簡易測量器具を用いていたと推定している。住民らが好奇の眼差しを向ける密測行動には簡易な装備が不可欠であり，海岸部こそ緯経度線を加えた図が少なくないが，内陸部ではそれを割愛した図が多い。それは彼らが天測に必要な器具を携帯していなかったことを示唆するという。そして，そうした手描き原図の成果は，清国20万分１図に編集されるが，完成した図幅は没個性的で一般的な地形図や地勢図の様式に統一されてゆくが，如何せん派遣将校たちの通過範囲を外れる部分の空白が多すぎ必然的に使途が限定された。また清国製絵画式地貌表現の「皇預全覧図」をもとに十里方眼図が作製されたが，20万分１図との併用は容易ではなく，さらに両者の欠を補うため作製された輯製30万分１図は製版時期から推して日清戦争の実戦には役立たなかったと推定している。地図が軍事資料であることは当然ながら，実際に軍用に供する戦地の地図がどのように作製されたかに関する重要な情報を多数掘り起こした点は特筆に値する。また陸軍将校の踏査においての調査項目は，明治初期の参謀本部『共武政表』など初期軍事統計の調査項目と類似する点にも興味をおぼえた。なお，本章に関連して「『満洲紀行』」（小林），「路上測図」（小林），「清国二十萬分一圖と英国海図」（鳴海・小林）のコラム３件を収録し，本論の理解を助けている。

第５章「朝鮮半島における初期外邦測量の展開

と『朝鮮二十萬分一圖』の作製」（渡辺・山近・小林）は，前章の中国大陸にやや遅れてはじまった朝鮮半島での陸軍将校の測量成果を明らかにしている。先行する成果はイエズス会士の指導下で中国人数学者の行った漢城（ソウル）の測量程度であるのに加え，成果図にあたる「朝鮮二十万分一図」の現存も明治天皇展覧用に相当する防衛研究所千代田史料に限定されるという。測量旅行の実態は中心的役割を担った海津三雄の『東京地学協会報告』掲載の記録を軸に，関連する史資料で補完する方法を採っている。元山や仁川付近の通行許可不要地域での大縮尺図の測量作業では，方位や距離を予め記憶して目立たないところでフィールドノートに測量結果を記載する「手帳式」とよばれる測量法が採られたという。そもそもベースマップとなる高精度の近代地図を欠く朝鮮半島では前述の「朝鮮全図」がそれに相当する可能性が高いというが，それでさえ中国大陸図とは異なり経緯線を欠いているため，経緯線の比較的詳細な海図などから情報を得たと推定している。朝鮮20万分１図の成立過程を詳細に跡づけたと同時に，「手帳式」とよばれる密測法の実態を明らかにした点が特に興味深かった。また本章に関連して「『沿道指鍼』・『沿道圖説』・『沿道誌』」（小林・渡辺），「日本作製図の国際的利用：ドイツ製東アジア図の検討から」（山近・渡辺・小林）の各コラムが設定されている。

第６章「広開土王碑文を将来した酒匂景信の中国大陸における活動」（山近・渡辺・小林）は，1880年発見説の有力な広開土王碑について，その拓本を日本に将来したとされる酒匂景信の改ざん疑惑に関わる従来の諸説に対し，作製地図の観点から再考を加えようとする異色の論考である。カギとなる10万分１「満州東部旅行図」は奉天から通化の範囲を描出し，そのなかには広開土王碑の所在する洞溝（現集安）が含まれる。同図はその注目すべき箇所にスケッチを添えているが，広開土王碑そのものについては特別の記載はない。しかし，参謀本部編纂課員横井忠直の『高勾麗古碑考』（1889年）には実地調査を行った酒匂の復命書の抜粋と推定されている「碑文之由来記」が引用され，その記載は「満州東部旅行図」と基本的に一致するという。そのため本稿は酒匂が広開土王碑拓本の入手も一連の地理情報収集活動の一環で実施したと結論づけている。酒匂の行動様式を明らかにした点は評価できるが，旧説の論点である碑文拓本の改ざん疑惑についてどのような展望が得られたのかについても知りたい気がした。

「第Ⅲ部　アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図データベース構築過程と目録」は，本書全体に関わるLCのデータベースを含む所蔵情報を提供する。

第７章「アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図データベースの構築」（小林・山近・渡辺・鳴海・山本健太・波江彰彦）は，まず本書の主な分析対象の20万分１図や10万分１ルート図以外にも，LCに所蔵される中心都市を簡略に描写した大縮尺図などの情報を提示する。ついでその調査では各々の地図について書誌事項とサイズに関してカード化を行い，デジタルカメラによる撮影では分割撮影を余儀なくされたこと，またデータベース公開には目録による画像検索のみならずイパレット・システムの導入を紹介している。加えて「アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図データベースの構築と貢献」（山本健太）をコラムとして添え，「目録１『アメリカ議会図書館蔵　初期外邦測量原図』目録」，「目録２　アメリカ議会図書館蔵『清国二十萬分一圖』目録」が巻末に解題とともに収めた。

前著に劣らぬ大部な研究報告書だけに要約のみで規定の紙幅に達しつつあるが，いくつか所感を述べて，評者の責めを塞ぐこととしたい。まず，書題にある「海外地理情報」の意味に複数の解釈があるように思われた。第１章で小林の述べた地図から得られる情報，その作製背景にある地理的事情（15頁）と，第６章で用いられた「碑文之由来記」のような地誌的報告（あるいは地誌書）の，少なくとも２つの意味で用いられているように感じた。特に厳密な定義の明確化を求めるつもりはないが，GISの登場前後から急速に学界で普及し，現在でも多様な解釈の下に頻用されることの多い「地理情報」という用語ゆえに，ともすればさまざまな理解も可能である。そのため本書での執筆者間の共通の理解を示して頂けると，読者として有り難いように感じた。

つぎに全編を通した手描き地図と製版地図の関係を考察しようとする観点は，今後の近代地図史（場合によっては近世以前でも）に大いに刺激的

だと感じた。日本内地の地形図の作製や図歴については「教科書的情報」が確立しているかに見える。評者の勉強不足もあろうが，その原図と製版図との関係を明確に説明した研究にはあまり心当たりがない。そもそも現行地形図に記される地名さえ，現地調査に拠っているとは知りつつも，実際にどのような調査を経て，修正が加えられているのかさえ，評者は知らない。そうした空隙を埋める研究視角を提示したという点でも本書の意義は大きいと思われる。

最後に本書で用いたLC所蔵史料の多くは陸地測量部が所蔵し，第二次大戦後の占領期にGHQが接収したものであろう。評者はかつて陸地測量部にあった写真班（地図の写真製版のみならず，初期には写真撮影自体も担当）の調査を試みたことがあったが，当時国土地理院の説明では戦中期の資料疎開時に新宿駅で空襲を受けて焼失したため現存せずとの説明を受け，それ以上の追跡を断念した。LCが明治期の地図原図をこれだけ多数所蔵しているのであれば，当該課題についてもまだ調査の余地があるのではないかと期待を寄せた次第である。

（三木理史）